

令和6年12月9日
公認会計士・監査審査会

短答式試験の1問あたりの配点及び試験時間等の調整について

公認会計士試験の短答式試験は、「基本的な問題を幅広く出題することにより、論文式試験を受験するために必要な知識を体系的に理解しているか否か」を判定する試験です。

しかしながら、現在の短答式試験において、計算問題のある科目（財務会計論及び管理会計論）では、各科目の配点（合計点）に対して問題数が少なく、1問あたりの配点が高くなっています。これらの科目における1問あたりの配点は、8点から4点まで2倍の差があり、公認会計士試験の受験者数が増加している中で、1問あたりの配点の差が試験の可否に与える影響が大きくなっていると考えられます。

また、計算問題のある科目において問題数が少なくなっていることは、「基本的な問題を幅広く出題する」という短答式試験の位置付けからも課題があると考えられます。

このような状況を踏まえ、短答式試験において受験者の知識や能力等をより的確に判定できるよう、計算問題のある科目（1問あたりの配点が高い問題のある科目）において、問題数を増やし1問あたりの配点を引き下げ、それに伴い各科目の試験時間の調整を行うなど、短答式試験の1問あたりの配点、問題数及び試験時間等について調整を行う必要があると考えられます。

このため、短答式試験について、各科目の配点（合計点）や問題の難易度など現在の短答式試験の基本的な形は維持しつつ、1問あたりの配点、問題数及び試験時間等の調整を令和8年公認会計士試験第I回短答式試験より行う予定です。

短答式試験の時間割も含め、この短答式試験の1問あたりの配点及び試験時間等の調整の詳細については、来年6月に予定している令和8年公認会計士試験の施行公告のタイミングで示します。

なお、このほか、公認会計士試験の受験者数が増加している状況を踏まえ、より多くの受験者が論文式試験を受験できるようにし、それに伴い論文式試験において競争が促されることで、より質の高い合格者を選抜できるよう、短答式試験及び論文式試験の合格基準等の見直しを令和9年公認会計士試験以降に行うことについても併せて検討を行っており、これらについても決定し次第公表します。

<参考> 短答式試験の1問あたりの配点及び試験時間等の調整の検討状況

現在の短答式試験において、計算問題のある科目（財務会計論及び管理会計論）では、問題数が少なく1問あたりの配点が高くなっています。一方で、理論問題のみの科目（監査論及び企業法）では、問題数に対して試験時間に余裕がある状況となっています。

このような状況を踏まえ、短答式試験において受験者の知識や能力等をよりの確に判定できるよう、以下のように、計算問題のある科目（1問あたりの配点が高い問題のある科目）において、問題数を増やし1問あたりの配点を引き下げ、それに伴い、計算問題と正誤判定の理論問題では1問あたりの解答に要する時間が異なることも勘案し、各科目の試験時間の調整を行うことを検討しています。

- ・財務会計論：現状は、配点200点、試験時間120分、問題数28問。
→理論問題及び計算問題の問題数を増やし、1問あたりの配点(8点)を引き下げ、問題数の増加に応じて試験時間を調整。
- ・管理会計論：現状は、配点100点、試験時間60分、問題数16問。
→計算問題の問題数を増やし、1問あたりの配点(8点・7点)を引き下げ、問題数の増加に応じて試験時間を調整。(理論問題の1問あたりの配点は5点のまま)
- ・監査論：現状は、配点100点、試験時間60分、問題数20問。
→問題数は変更せず、試験時間を調整。(1問あたりの配点は5点のまま)
- ・企業法：現状は、配点100点、試験時間60分、問題数20問。
→問題数は変更せず、試験時間を調整。(1問あたりの配点は5点のまま)

※ 今回の調整は、短答式試験の1問あたりの配点、問題数及び試験時間等のバランスを調整するものであり、各科目の配点（合計点）及び計算問題と理論問題の合計点の割合並びに出題する問題の難易度等について変更を行うものではありません。

(以 上)